

中村幸彦著 『近世文芸思潮攷』

中野, 三敏
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12121>

出版情報 : 語文研究. 41, pp.44-46, 1976-03-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

中村幸彦著 「近世文芸思潮攷」

中野 三敏

この著者に、この書名で、紹介などという事自体が、今更らしく迂遠なことのようと思われる始末であるが、編集部の厳命に敢て試みる次第である。

幕初儒者の文学観から幕末歌論に至る迄、近世全期にわたり、漢学・詩文・歌俳・院曲・戯作と、近世文芸の殆んど全分野にわたってその文芸論・文学観を採つたもの。著者が従来折にふれて発表されたものから十四篇の論文を全四〇二頁に集めてある。著者後語にも記される通り、早くは昭和二十六年の一篇に初まって、三十年代四つ、四十年代九つの論の集成であるが、何れも発表された時点での学界に与えた衝撃は言わずもがな、殆んど十数年を経過した今日に於て、ようやく学界最新の動向が、比の書に説かれていることと軌を一にし始めている有様を見る時、著者の識見が如何に高かったか、展望が如何に時流を抽んで遠くに及んでいたかを、今更乍ら思いしらされることである。

第一篇「幕初宋学者達の文学観」は、岩波講座「日本文学史」第七巻の「近世儒者の文学観」の内から、論題にそつた部分を

更に詳しく改稿されたもの。思えば近世文芸を雅俗の二範疇に於いて把えようとされたのも、敢えて著者の創見と断じてもよからうし、しかも文学観に於いて雅文壇は常に俗文壇のそれを数歩もリードして、近代につながる萌芽も雅文壇に於て専ら育てられたとする、これこそ著者の確固たる持論も、従来ともすれば近世文芸即庶民文芸・俗文芸といった概念でしか把えられていなかつた実情にてらした時、最も光彩を放つ所であるのだが、その近世雅文壇の中心をなす儒学界初発の文学観を、惺窩・羅山・闇齋その他の言説に即して採り出したものがこの論である。その意味で読者は巻頭のこの論に於いて、著者の最も特徴的な姿勢を、まづ明瞭に知らされることになる。

次の「石川丈山の詩論」は前章の儒者達と殆んど同時代を生き乍ら、洛北詩仙堂に幽潜して隠詩人としての生涯を貫き、殆んど近世最初の詩人と称し得る丈山の詩論を、真向からとりあげた論である。そこでは日東の李杜などという評価とは裏腹に「極端に言えは四分五裂」とも思える程の混乱と誤解を見せ乍らも、草昧期の近世漢詩壇にあって、何とか自己一流の詩論詩

風を打ちたてる可く懸命に努力した丈山の力業が明かされている。

第三は「文学は「人情を道ふ」の説」で、今度の論集の中で最も早く発表され、しかも千古の確論として著者の名を不動のものとした記念碑的論文である。元禄期の上方文化の光彩の中心を、京都堀川の古義堂の主伊藤仁斎の「道人情」の説に置き、それが前代の勸懲的文学観を超えて、謂わば元禄ヒューマニズムの理論的根拠であったことを指摘し、契沖・近松・芭蕉・西鶴といった、元禄文化のそれ／＼の核を作る人々の言説の中にそれを立証して見せたもの。こゝには文学の一ジャンルを縦割りにしに攔むのではなく、あらゆるジャンルにまたがって横割りにその全面を過不足なく把握するという、著者の最も特徴的な研究方法のまことに見事な成果が示されている。

続く「俳趣の成立」と「虚実皮膜論の再検討」の二篇は、俳階と浄瑠璃に於ける、美意識と作劇論の問題を論じて、前者では「相違する要素が巧みに組み合わさって一種の調和に達したものが俳諧の美意識であると断じて、これを「表現の時代性」なる命題にからめて論じてある。言われる所は、文学の内容に於いてそれ／＼の時代に応じた発想がある様に、表現にもまたそれが見られる筈であるし、それを見究めていくのが文学研究上必須のこととする。そして前述の如き美意識を持つ蕉風俳諧は、まさしく近世を代表する表現の時代性を持つていたと決論される。こゝにも著者の時代を横割りにする視点が有効に生かされているわけだが、この「表現の時代性」という問題は、著者にとって近年最大の関心事の様に見受けられる。後者では

「皮膜論」の用語の理解という面に焦点をすえての考究の結果、筆者を伊藤家古義学の門につらなる穂積以貫と断定して、その著述に沿って「義理」「人情」等の近松作品のキー・ワードを解きほぐしてある。こゝでも著者は浄瑠璃の論に伊藤家の古義学という、従来誰も考え及ばなかった取り合わせを行って見事に成功しているのである。著者にはまた「穂積以貫逸事」(文学・昭和48年1月)の論もある。

続く「文人服部南郭論」「柳里恭の誠の説」「五井蘭洲の文学歎」「隠れたる批評家」の四篇はそれ／＼著者の独壇場たる文人論・文人伝の諸篇である。南郭を論じては近代の萌芽期ともいふべき時期にあつて、その足を多く近世の側に残し乍らも近代的な生き方を希求したが故の矛盾を鋭くつき、柳里恭や蘭洲には朱子学の土壤に、かえつて新時代の温床となるべき可能性を具現した者として評価し、清田儂叟には儒者としての中国小説類の鑑賞の結果培われた批評眼が、我が国の文学に対しても遙かに時代を抽んでた鑑賞・批評を可能にした様子を解明してある。文人は近代の中に近代の萌芽を示し得た希有な存在として、近時その研究は盛況を見ているが、かゝる風潮は殆んど著者の是等の論によつて導かれたと断定しても誤りではあるまい。

続く「読本初期の小説観」「上田秋成の物語観」「滝沢馬琴の小説観」の三篇は、所謂戯作文学の中でも、その小説性に於いて中心をなす「読本」というジャンルの、発生期、発展期、完成期の姿を、それ／＼の時期の代表的な作家の言説を通して探つたものである。初期のそれは勝部青魚、清田儂叟、都賀庭鐘といった批評家・実作者の言説に沿つて、中国白話小説の理

解がそのまゝ、生かされて読本の小説観を形成したこと、秋成に於いては一段と洗練されて殆んど近代的と稱しても良い部分を持つに至ったこと、馬琴のそれは所謂「勸善懲惡」ではあるが、決して幕初の朱子学者のその如く思想が文学を包んでしまうのではなく、あく迄も文学の中に思想を包み込むという、極めて近代に接近した意識が証明されて、従来の逍遙に始まる馬琴理解が、実は誤解であったことを見事に論証してある。今後馬琴研究の定礎となるべき論であろう。

「小沢廬庵歌論の新検討」「景樹と子規」の二篇は何れも近世末期の歌論の検討であるが、この分野も従来僅かな専門家の意見を見るばかりの分野であった所へ歟を入れて、廬庵の歌論には石田梅岩の心学説と芭蕉の俳論の影響という、著者ならでの全く予想外の指摘が行なわれ、「景樹と子規」では廬庵の影響を最も強く受けた景樹と、それに罵言をあげた子規とを比較して、寧ろ子規の強調した歌論の殆んどが実は景樹によって既により理論的に述べられたものであり、子規の罵言は要するに景樹に対する誤解としか言えないものと結論されている。

以上十四篇にわたって粗雑な紹介を試みたわけだが、一言附け加えればB5版・四〇二頁のこの本は体裁の小ぶりに似合えず内容の浩瀚さに於いて群書に抽んでるもの。大著とはかゝるものを言う。小型の本はこの著者の御好みであるだけに、内容も著者快心のものである筈、従って読者諸賢、もし中村先生の眞骨頂を得たくば、今後ともよろしく小型本につかれんことを御奨めする。

(昭和五十年二月、岩波書店、四〇二頁、二一〇〇円)